

FLOSSCOMIICマンガ大賞 コミカライズ部門 課題用SS

著..穂菓つみき

■登場人物

主人公..シンシア（伯爵令嬢）

元恋人..フレデリック・テイバース（テイバース伯爵家当主）

現恋人..リアム・クイーンズ（クイーンズ公爵家当主）

■あらすじ（前提）

主人公シンシアは、魔力がないことを理由に、恋人のフレデリックに別れを告げられた過去を持つ。その後、大魔法使いと謳うたわれるクイーンズ公爵家当主リアムと出会い、彼に見初められて恋仲となる。しかしシンシアは、再び魔力がないことを理由に関係を断たれてしまうのではないかという不安を抱えていた。そんなある日、シンシアは夜会への参加を余儀なくされる。

舞踏場は、優雅な演奏と、さざめくような歓談で満たされている。壁際に立つシンシアが、そっとため息をついた。そのときだった。

「シンシアじゃないか！」

突然声をかけられ、見ると、そこには懐かしい顔があった。魔法が使えないシンシアであっさり捨てた元恋人の姿だ。

「フレデリック……」

しまった、と視線をそらそうと思った時には遅かった。

「また君に会えるなんて僕は幸運な男だ！ 元気にしていたか？」

フレデリックは、まるで古い友人に再会したかのような、屈託のない笑顔でシンシアに歩み寄ってきた。

最後に顔を合わせてからいくつもの季節が巡ったが、ゆるく波打つ金色の髪も、青く透き通った瞳も、記憶の中とさほど変わらない。

ただ一つを除いて。

隣には可愛らしい顔立ちの少女の姿があった。フレデリックの隣に立つために生まれてきたかのような金の巻き髪をまとめ上げ、長い睫毛が滑らかな肌に影を落としている。

シンシアが返事に詰まっていると、フレデリックの腕に寄り添う少女の淡い色の瞳が、好奇心を帯びて煌めいた。

「フレデリック様、こちらの方は？」

「シンシアさ！ ……前に、話したことがあったよね」

最後は小声になるよう少女に耳打ちしたフレデリックだったが、少女は驚いたような声を上げた。

「まあ、魔力が全くないと噂のー！」

その瞬間、シンシアのもとへ嘲笑を含んだ視線が集まる。少女の無垢が作られたものと悟り、胸の奥が重く沈んでいく。

（どうして、そんなふうに辱めるの……。フレデリックの心は、すでに貴女のものなのに）
現に、少女がシンシアに失礼な態度を取っているにもかかわらず、フレデリックはかけらも気にする様子がない。それどころか、少女を愛おしむように見つめているせいで視線のひとつも合わないのだ。

しかしシンシアは、傷ついた心を悟られまいと、両手を強く握りしめ口を開いた。

「ご婚約なさったと伺いました。おめでとうございます」

ようやくその場にシンシアがいたことを思い出したのか、フレデリックは少女から視線を外し、満面の笑みを浮かべた。

「ありがとう。そうだ、近く祝宴を聞くんだ。君も来てくれたら嬉しい」

フレデリックと少女が寄り添い、微笑みかけてくる。

「……考えておきます」

「……考えた声は、震えていなかったでしょうか。」

（誰か、ここから私を連れ出して）

逃げ出すこともできず、シンシアは目を伏せた。涙がこぼれてしまわないよう歯を食いしばると、目の前に差し出される手があった。

「待たせたね」

驚いて視線を上げると、煌びやかな夜会には似つかわしくない、質素なマントを羽織った男がそこにいた。黒髪のあいだから赤い宝石のような瞳がシンシアを見下ろしている。

「リアム様……？」

シンシアは瞬まばたいてから、迷うことなくその手を取った。緊張が一気に解けたせいとか、膝から力が抜け、体が傾く。

「あつ……」

抱き留められるのと同時に、低い声で笑われた。距離が近づいて、リアムの長く艶やかな黒髪が、シンシアの肩に落ちる。

「私に会えて、安心したのかな？」

「……っ、ど、どうしてこちらに？」

急激に頬が熱くなるのを誤魔化すように、シンシアは尋ねる。

今日は隣国に出かけていると聞いているのに。

「もとより迎えに来るつもりだった」

リアムはシンシアの冷たくなった手を握りこむと、庇かばうように隣へと引き寄せた。すると、フレデリックから困惑しきった声上がる。

「ク、クイーンズ公爵閣下……？」

リアムの登場が、舞踏場の空気を一変させ、その傍らに立つのがシンシアだという現実を驚きを隠せていないのがありありと分かる。

「私の婚約者に、何の用かな？」

「婚約者!？」

フレデリックが大げさに声を上げたせいで反応し損ねたものの、シンシアにとっても、それは初耳だった。

「……なにか、問題でも？」

リアムの声から、すつと温度が消える。腰に添えられた指先に力がこもったことで、その言葉がシンシアに向けられたもののように感じられ、心臓が跳ねた。

「いえ、問題というわけでは……ただ、彼女には魔力がない」

「伯爵は、私の婚約者を侮辱するのか？」

リアムは、面白い冗談でも聞いたように低く笑ったが、纏った空気が変わった。息が詰まるような静寂が落ちる。

いつの間にか、楽しげだった舞踏場の音楽は止んでいた。

「リアム様……」

シンシアがマントをわずかに引くと、美しい赤の瞳がこちらを見下ろした。

「それ以上は……私は大丈夫ですから」

あまりにも注目を集めすぎていた。

きつと明日には、さまざまな憶測が飛び交うだろう。魔法が使えないシンシアの評判は、それでも、リアムまで醜聞に巻き込んでしまうのは、あまりにも忍びなかった。

「もう、行きましょう」

シンシアの困惑が伝わったのか、リアムは口元を緩めた。

「伯爵、今日の君は運がいいらしい。シンシアに、感謝することだ」

フレデリックと少女が、同時に息をのむ。

リアムがマントを翻した。

「さあ、目を閉じて」

囁き声とともに、視界がぐにやりと歪んだ。魔法なのだ気づいたときには浮遊感に包

まれ、次の瞬間には、ひんやりとした外の空気に触れていた。

「……ここは」

どうやら、舞踏場から離れ、外廊下へと移動したらしい。

「庭園には先客がいた。ここで許してくれ」

少し前まで眩しいほどに明るい舞踏場にいたせいとか、外廊下の灯りには物足りなさを覚える。けれどリアムの横顔を見た瞬間、その感覚は消え去った。舞踏場よりも月光を頼りにする闇夜のほうが、リアムの美しさを際立たせていた。

そのとき、シンシアの薬指にはめられた、リアムの瞳と同じ色をした宝石が月光を跳ね返した。

「いつの間……」

驚いて手を月光にかざすシンシアの反応を笑ったリアムは、その手を取った。

「シンシア、どうか私と結婚してほしい」

「……でも」

シンシアは、信じがたい思いでリアムを見つめた。

魔法が使えない自分には恐れ多い。これは都合のいい夢なのだと、言い聞かせるように。けれどリアムは、ただシンシアだけを一心に見つめていた。

「ひとつ、魔力がないことは、求婚を断る理由にはならない」

胸の奥に抱えていた不安は、見透かされたように、先回りして封じられてしまう。

「……心を読むのは、やめてください」

「君は、考えていることが顔に出やすい」

そんなはずはない、と抗議を試みる。

けれど、愛おしむ色を隠さない瞳に受け止められると、言葉が出ない。

「夜が更ける前に、返事をもらえないだろうか？」

こんなにも嬉しいことがあるのだろうか。

この世で唯一、シンシア自身を見てくれる人と結ばれようとしている。

シンシアは、リアムの手をそっと握り返した。

「ずっと……私を、お傍そばに置いてくださいね」

その言葉ごと、リアムは当然だとも言うように、シンシアに口付けた。